

目次

- 調査票について
- 非認知能力ごとの児童数
- 現状の児童の役割について
- 非認知能力と周りの人数について
- 非認知能力と役割の有無
- 角非認知能力と関わりのある役割
- 放課後過ごす場所ごとの児童数
- 放課後過ごす場所と非認知能力
- 放課後過ごす場所と役割
- 進んで行くかの児童数
- 進んで行くかと非認知能力
- 進んで行くかと人数和
- 進んで行くかと役割の有無
- (ラ)や(リ)と非認知能力

<調査票について>

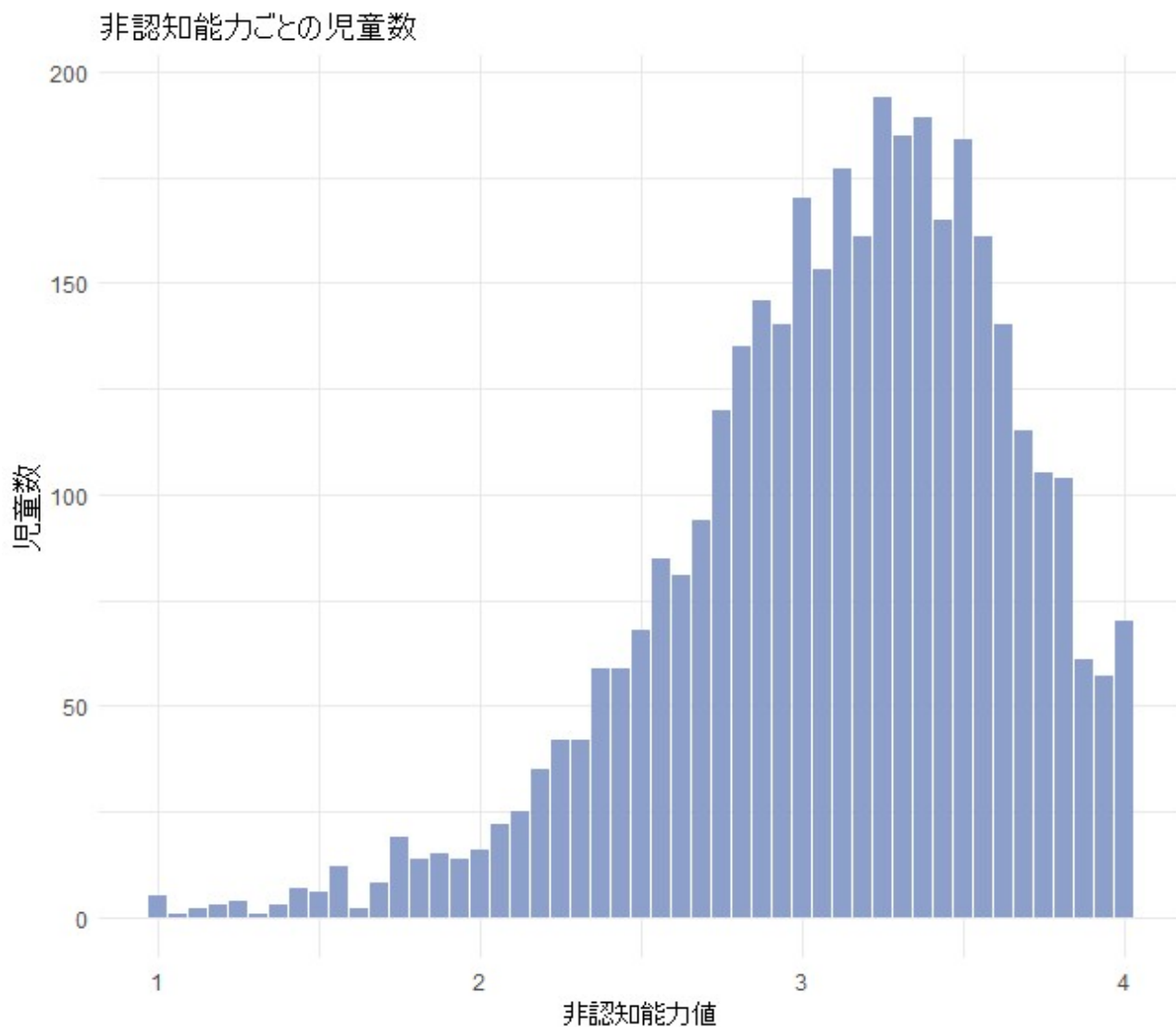
項目文(ス)-(マ)とその項目に対する分類された非認知能力

項目文	非認知能力
(ス)ははっきりした答えが出るまで、ずっと考える方だと思いませんか。	好奇心
()みの周りにある色々なことにきょうみをもつ方だと思いませんか。	
気になったことがあると、とことんしらべたいと思いませんか。	
人の話をじっくりと聞くことで、自分の考えがまとまることがありますか。	知的謙虚
課題にとり組んでいるときに、あなたが失敗したことからヒントを見つけることはありますか。	
新しいことにちょうせんしたいと思いませんか。	好奇心
約束を守ったり、最後まで決めたことをやる方だと思いませんか。	セルフコントロール
課題がおわったら、分かったことや学習の仕方について、まとめておくようにしていますか。	メタ認知
自分の考えたやり方や理由を、ほかの人の考え方も聞いて、見つめ直すようにしていますか。	
課題にとり組んでいるとちゅうに、自分のやり方がうまくいっているか、たしかめながらとり組むようにしていますか。	
自分の知っていることをむすびつけながら、考えるようにしていますか。	
決めた事をやり終えるまで、楽しい事をあとにする方だと思いませんか。	セルフコントロール
うまくいかないときには、なぜできないのかを考え、やり方をかえたり、つぎの方法をためしたりしていますか。	知的謙虚
分からないことがあったときには、いちど立ち止まって考え直すようにしていますか。	メタ認知
自分にはよいところがあると思いませんか。	自己肯定感
人のためになることをしたいと思いませんか。	

項目文(ア)-(シ)とその項目に対する分類された役割

調査項目/役割	大分類役割
(ア)こまったことやなやんでいることがあるとき、相談したい人	相談相手
(イ)あなたが失敗したり間違えたりしても、いつもと同じように接してくれると思う人	評価しない役割
(ウ)一緒にいると、安心して自分らしくいられる人	安心な場所
(エ)あなたに、知らないことや新しく楽しいこと、ワクワクすることを教えてくれる人	新しい視点の提供者
(オ)あなたの性格など、あなた自身のことを知ってくれていると思う人	理解者
(カ)話したいことがあるとき、話したいと思う相手	遊び・話し相手
(キ)あの人のようになってみたいと思うような、尊敬しあこがれる人	モデル
(ク)はずかしくて思っていることを言い出せないときに、あなたに代わって伝えてくれる(くれそうな)人	翻訳者
(ケ)落ち込んだときに、はげましてくれる(くれそうな)人	理解者
(コ)分からないことがあったときに、教えてくれる(くれそうな)人	相談相手
(サ)だれかとけんかしたときなどに、間に入ってくれる(くれそうな)人	仲介者
(シ)あなたがしたことではないのに、あなたのせいにされてしまったときに、守ってくれそう・助けてくれそうな人	仲介者

<非認知能力値ごとの児童数>



横軸：非認知能力値

縦軸：児童数

※非認知能力値とは…

「1.そう思う」⇒ 4

「2.どちらかといえば、そう思う」⇒ 3

「3.どちらかといえば、そう思わない」⇒ 2

「4.そう思わない」⇒ 1

と数値化し、非認知能力に関する 12 項目の平均をとったもの

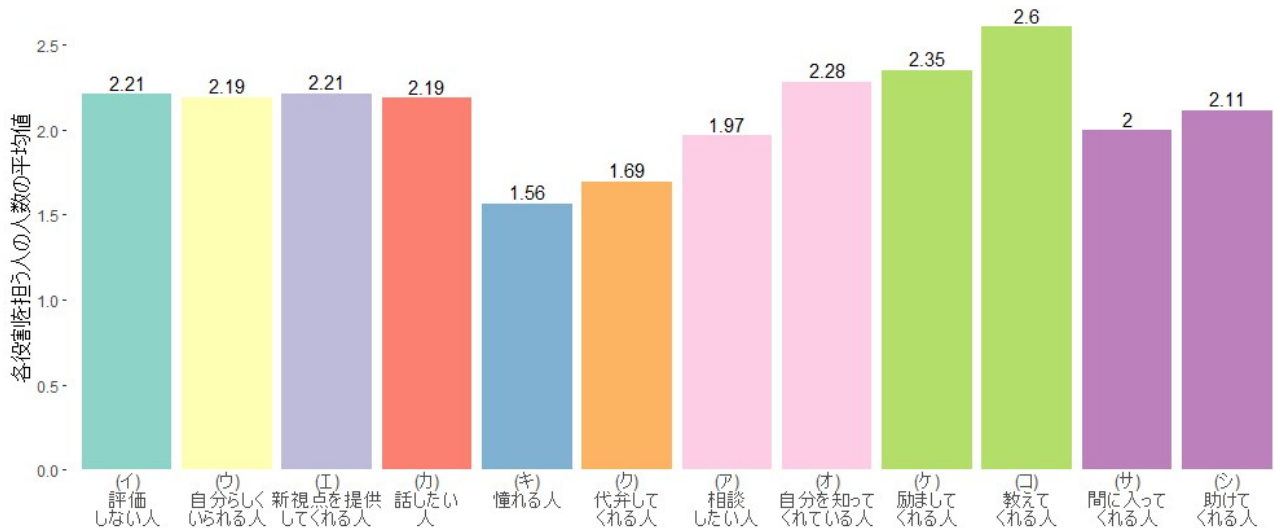
考察：平均をとると、「どちらかといえばそう思う」程度になる児童が多い

まず、周りの人についてお聞きします。

それぞれの文章を読み、当てはまる人を全て選びましょう。 <役割に関する項目>

<現状の、児童の周りにいる役割について>

各役割ごとの担う人の人数について



横軸：役割

縦軸：役割を担う人数の平均(選択した数の平均)

※役割の人数とは…

役割に関する項目では、あてはまる選択肢を全て選ぶ方式

→選んだ個数=役割を担ってくれている人数

例 (ア)こまったことやなやんでいることがあるとき、相談したい人

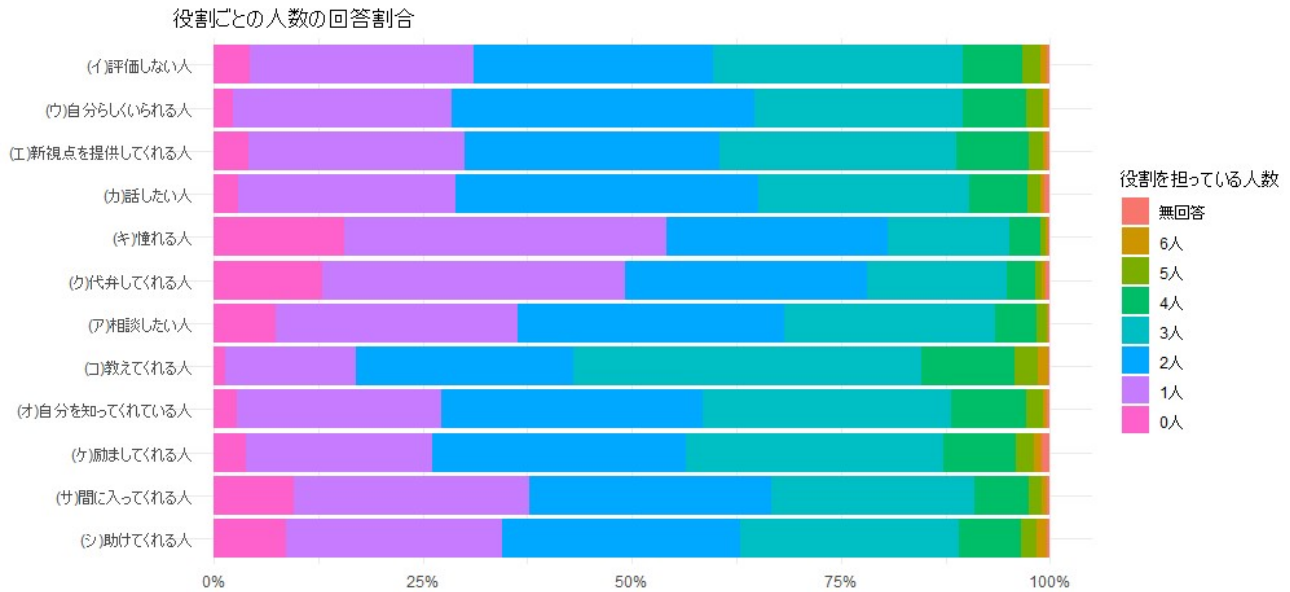
「1.放課後学習支援教室の先生」・「2.キッズクラブ・学童の先生」・「3.友達」・「4.学校の先生」・「5.保護者・おうちの人」・「6.その他の人(例・地域の人など)」

であてはまる(選んだ)数を役割に関する項目の人数とする。

「7.いない」を選んだ場合は0とする。

考察：「(キ)あの人のようになってみたいと思うような、尊敬しあこがれる人」・「(ク)はずかしくて思っていることを言い出せないときに、あなたに代わって伝えてくれる(くれそうな)人」 が少ない。

⇒役割を担う人を増やすカギであると考えるので、難しいとは思いますが児童に意識をむけて手助けをするという働きかけがあるとよいかもしれない。



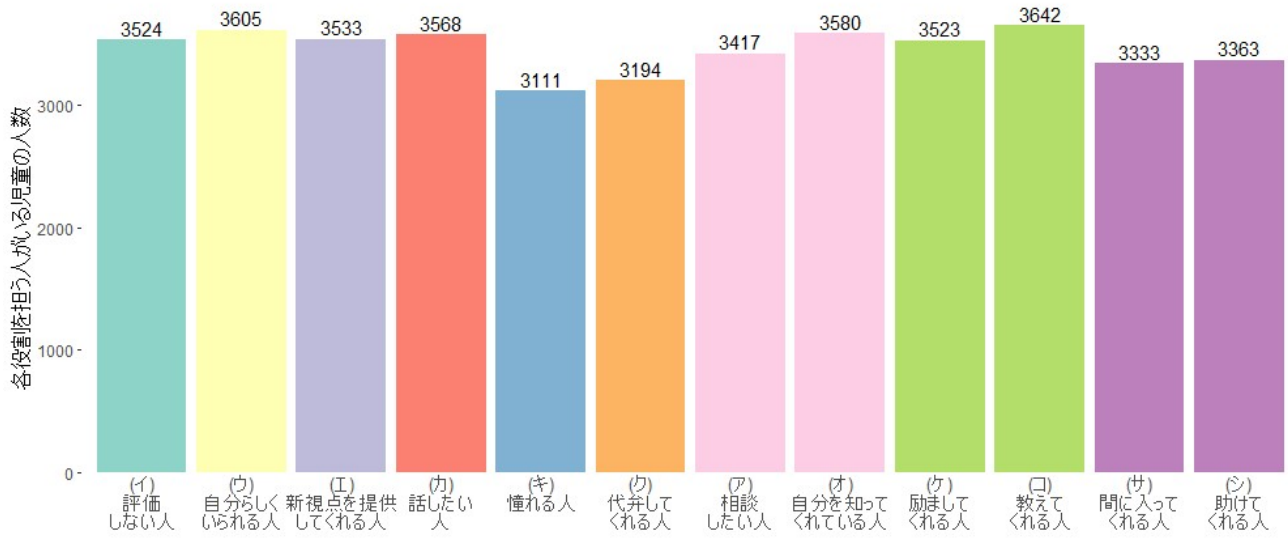
横軸：回答割合

縦軸：役割

考察：「(コ)分からないことがあったときに教えてくれる人」に関して、約50%の児童は3人以上いると回答している。一方で、「(キ)あの人のようになってみたいと思うような、尊敬し憧れる人」や「(ク)はずかしくて思っていることを言い出せないときに、あなたに代わって伝えてくれる(くれそうな)人」に関しては、約50%の児童が1人以下と回答している。

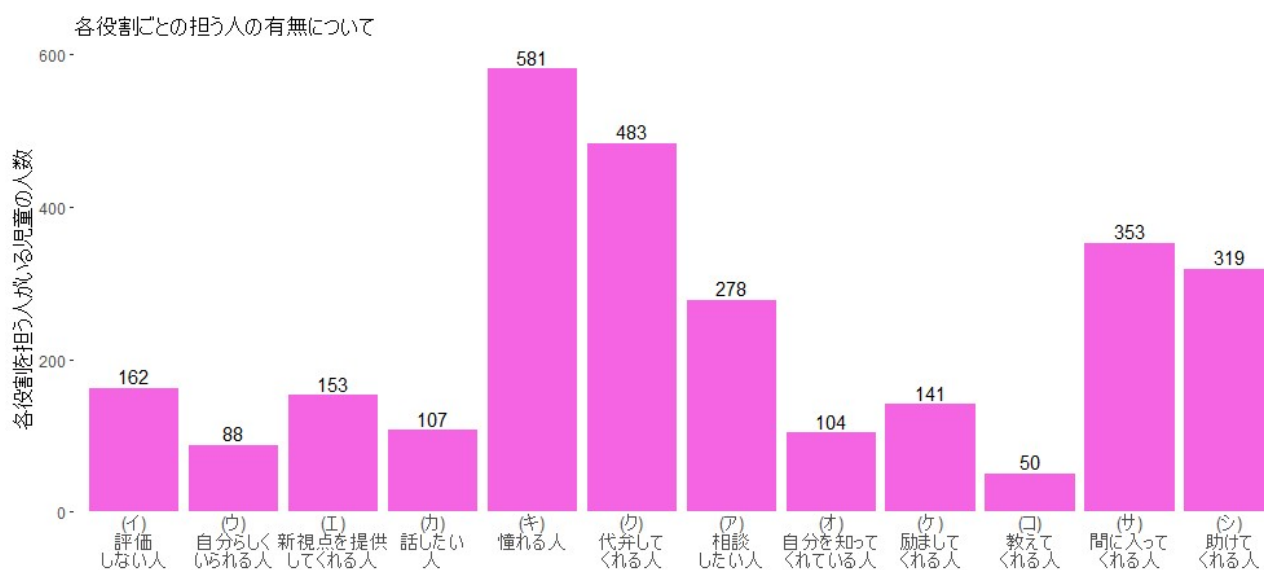
⇒個々の児童によって異なるが、この二つの役割を担う人を増やしていくと良いと考えられる。

各役割ごとの担う人の有無について



横軸：役割

縦軸：役割ごとに、役割を担う人がいる児童の人数



横軸：役割

縦軸：役割ごとに、役割を担う人がいない児童数

わかること：モデルがいない児童が多い

教えてくれる人がいない児童は少ない一方、悩みがあるとき相談したい人がいない児童は多い(児童は悩みが少ない?)

まず、周りの人についてお聞きします。

それぞれの文章を読み、当てはまる人を全て選びましょう。

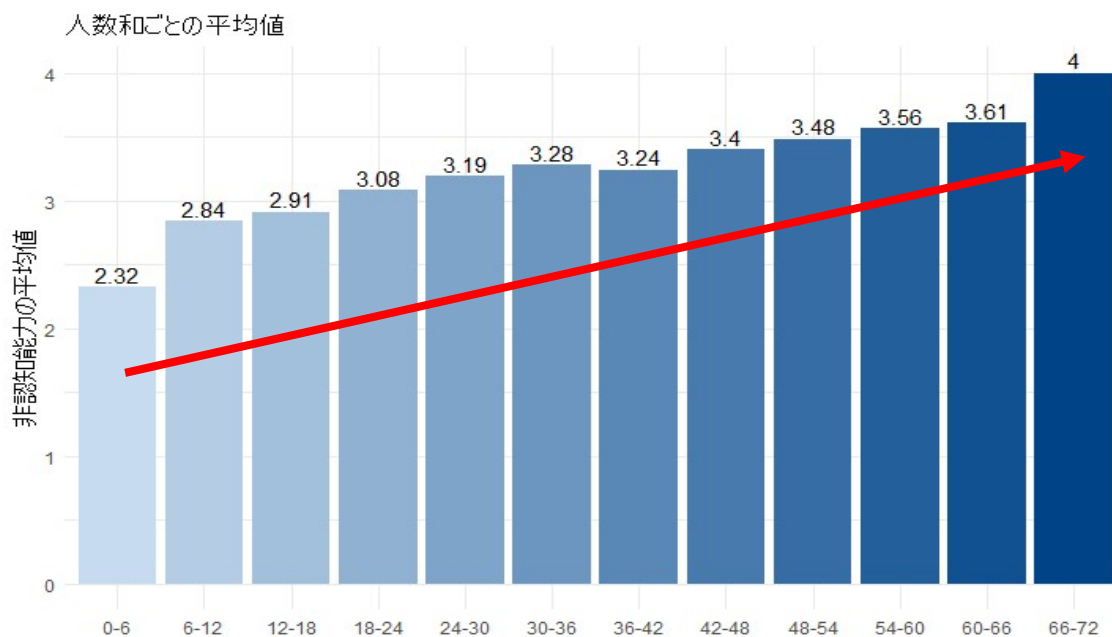
<役割に関する項目>

次は、学習や生活に対する意識に関する質問です。

それぞれの質問を読んで、あてはまる答えを一つだけ選びましょう。

<非認知能力に関する項目>

<非認知能力と周りの人数について>



横軸：役割に関する 12 項目の人数の和

縦軸：非認知能力の平均

考察：役割を担う人が多い方が、非認知能力が大きくなる傾向 がある

※役割に関する 12 項目の人数の和 とは…

(ア)-(シ)の 12 項目において

(ア)こまったことやなやんでいることがあるとき、相談したい人

「1.放課後学習支援教室の先生」

「2.キッズクラブ・学童の先生」

「3.友達」

「4.学校の先生」

「5.保護者・おうちの人」

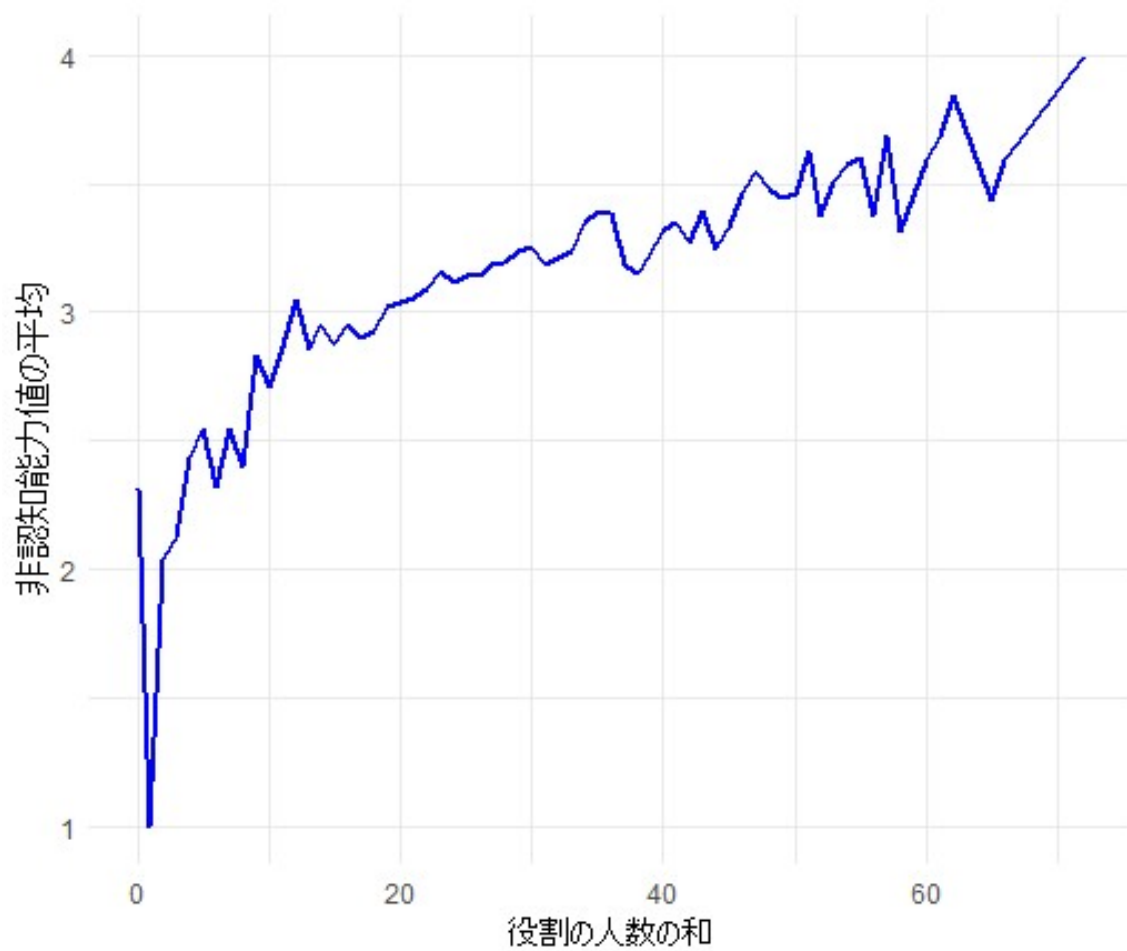
「6.その他の人(例・地域の人など)」

であてはまる(選んだ)数を役割に関する項目の人数とする

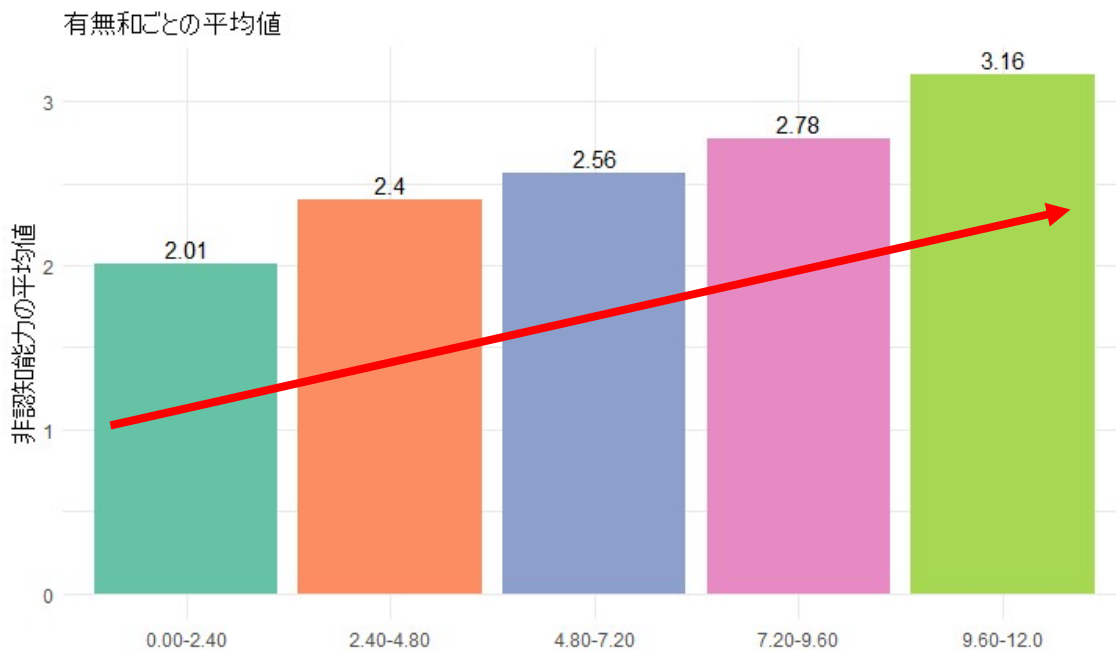
「7.いない」を選んだ場合は 0 とする。

これを 12 項目分行い、和を求める。

役割の人数による非認知能力値の推移



<非認知能力と役割の有無>



横軸：役割に関する 12 項目の有無の和

(例) 0-2.40 とは・・・12 項目のうち、0-2 項目において、役割があると回答した児童のグループ

縦軸：非認知能力の平均

(例)2.01・・・12 項目のうち、0-2 項目において、役割があると回答した児童のグループの非認知能力の平均

考察：役割が多い方が、非認知能力の値が大きくなる傾向 がある

※役割に関する 12 項目の有無の和 とは…

(ア)-(シ)の 12 項目において

(ア)こまったことやなやんでいることがあるとき、相談したい人

「1.放課後学習支援教室の先生」

「2.キッズクラブ・学童の先生」

「3.友達」

「4.学校の先生」

「5.保護者・おうちの人」

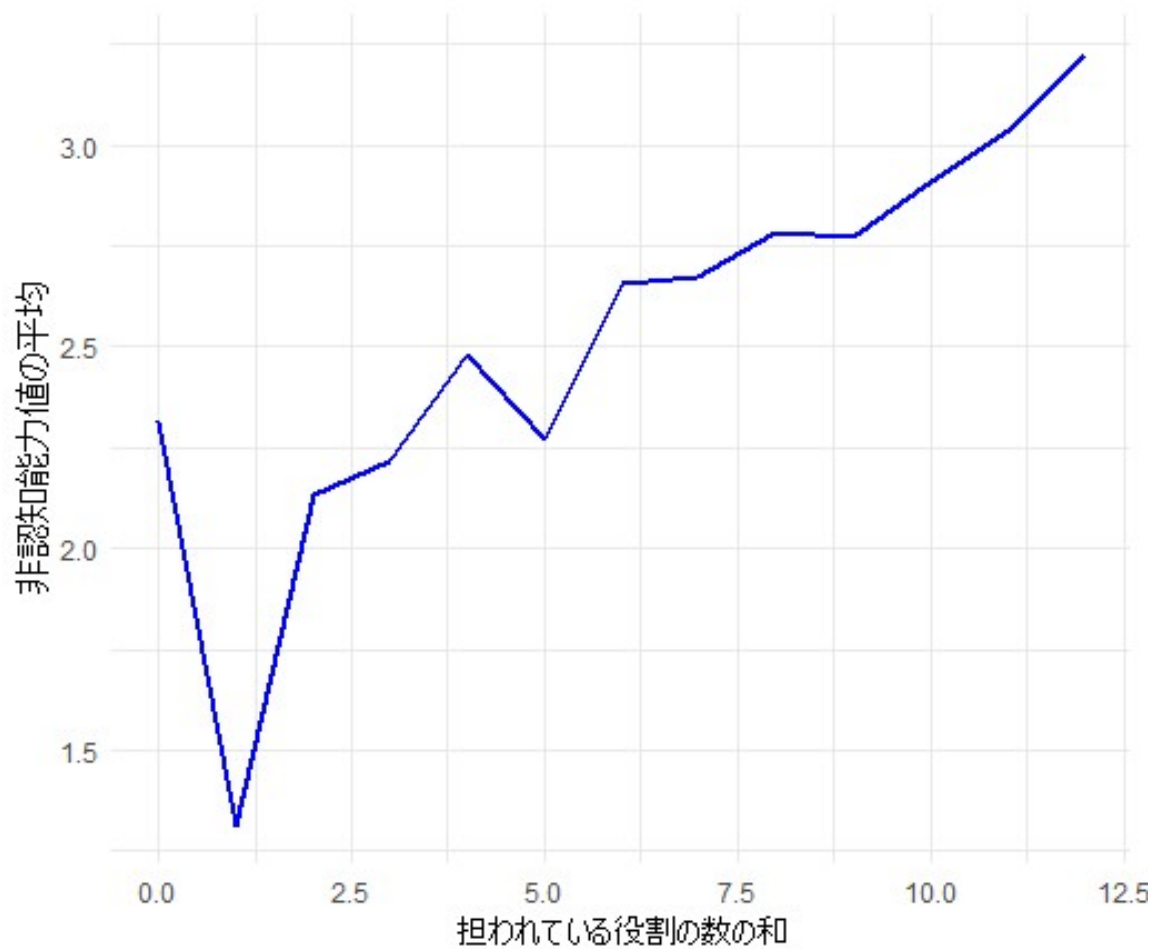
「6.その他の人(例・地域の人など)」

のどれかを選んだ場合、1

「7.いない」を選んだ場合、0 とする。

これを役割に関する項目の有無とし、12 項目分行い、和を求める。

役割数による非認知能力値の推移



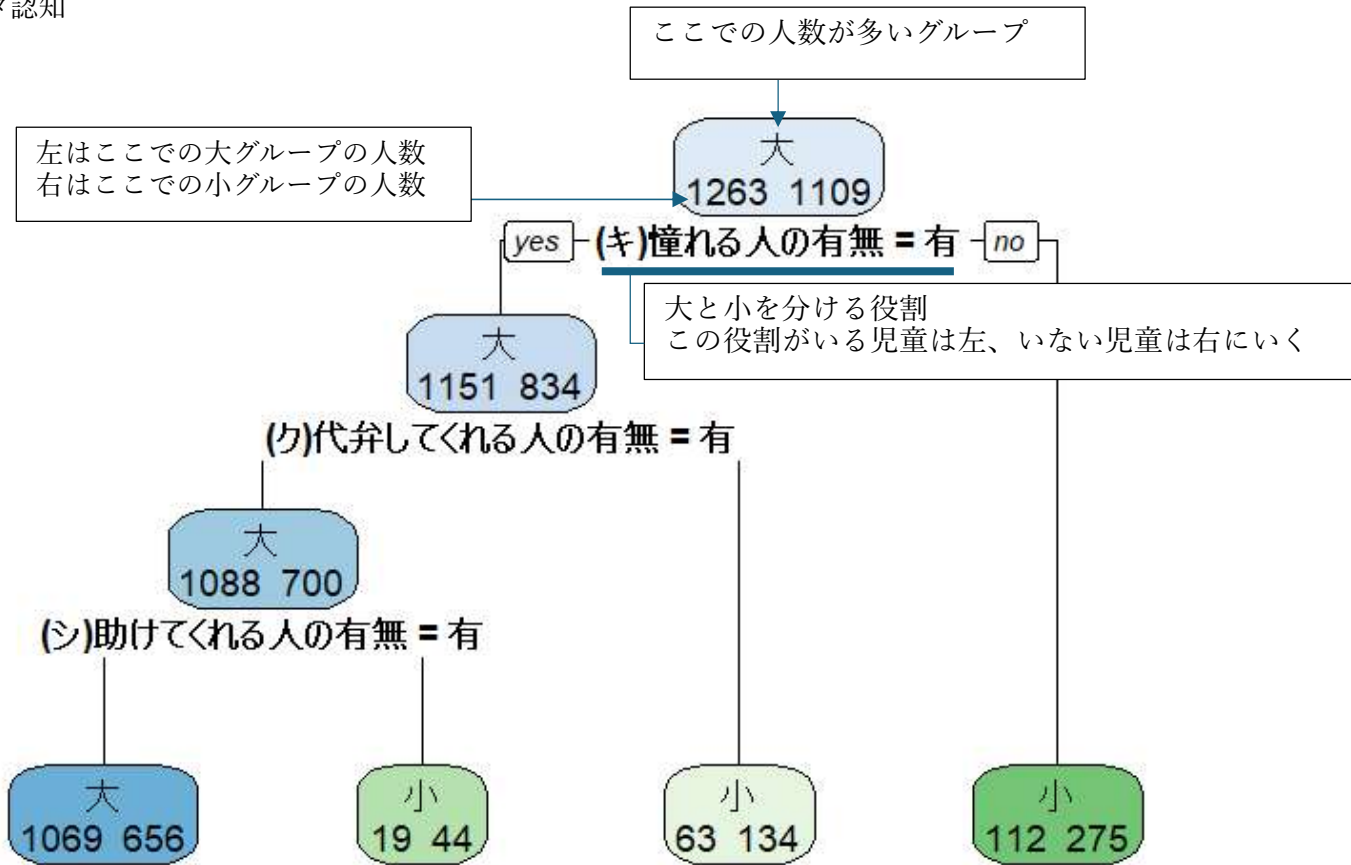
<各非認知能力と関わりのある役割>

各非認知能力ごとに、非認知能力値によって、児童を3グループ(高い順に大,中,小)に分けた。

目的変数を各非認知能力の大と小、説明変数を役割の有無とした決定木を使用し、

非認知能力値が大と小を分ける役割=各非認知能力と関わりのある役割を求めた。

・メタ認知



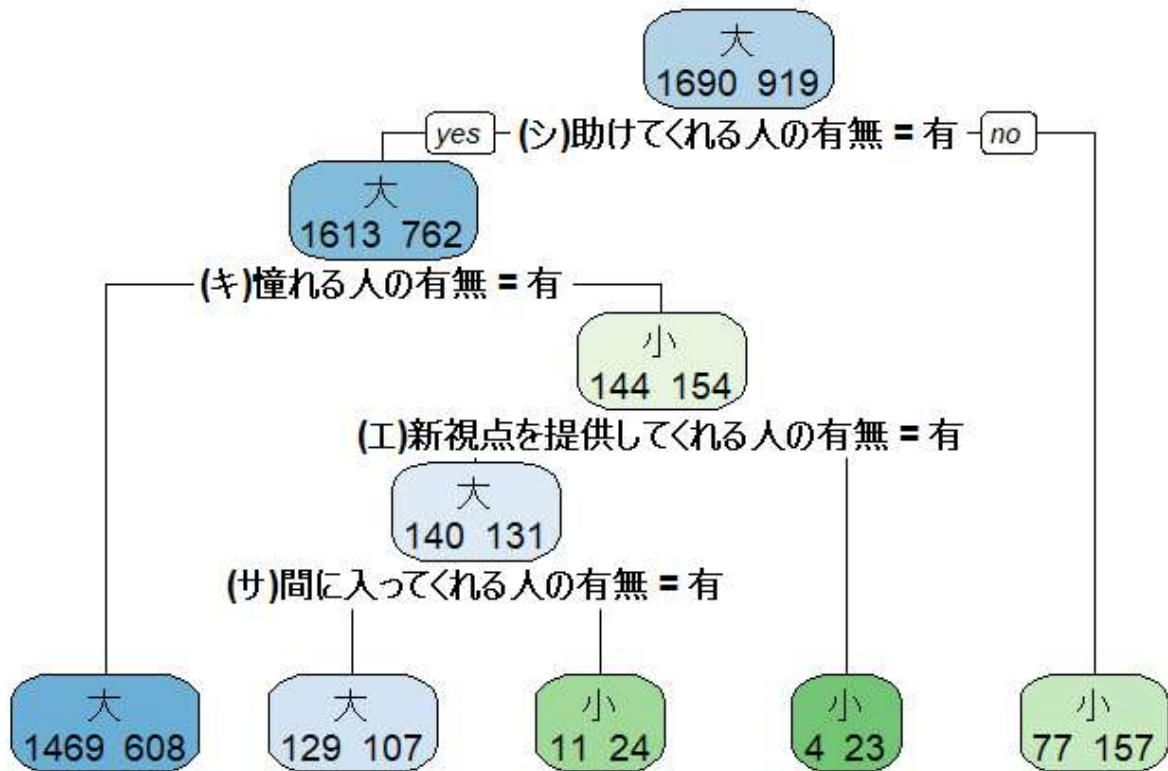
メタ認知が大きい児童グループと小さい児童グループを分ける役割

「(キ)あの人のようになりたいと思うような、尊敬しあこがれる人」

「(ク)はずかしくて思っていることを言い出せないときに、あなたに代わって伝えてくれる(くれそう
な)人」

「(シ)あなたがしたことではないのに、あなたのせいにされてしまったときに、守ってくれそう・助
けてくれそうな人」

・好奇心



好奇心が大きい児童グループと小さい児童グループを分ける役割

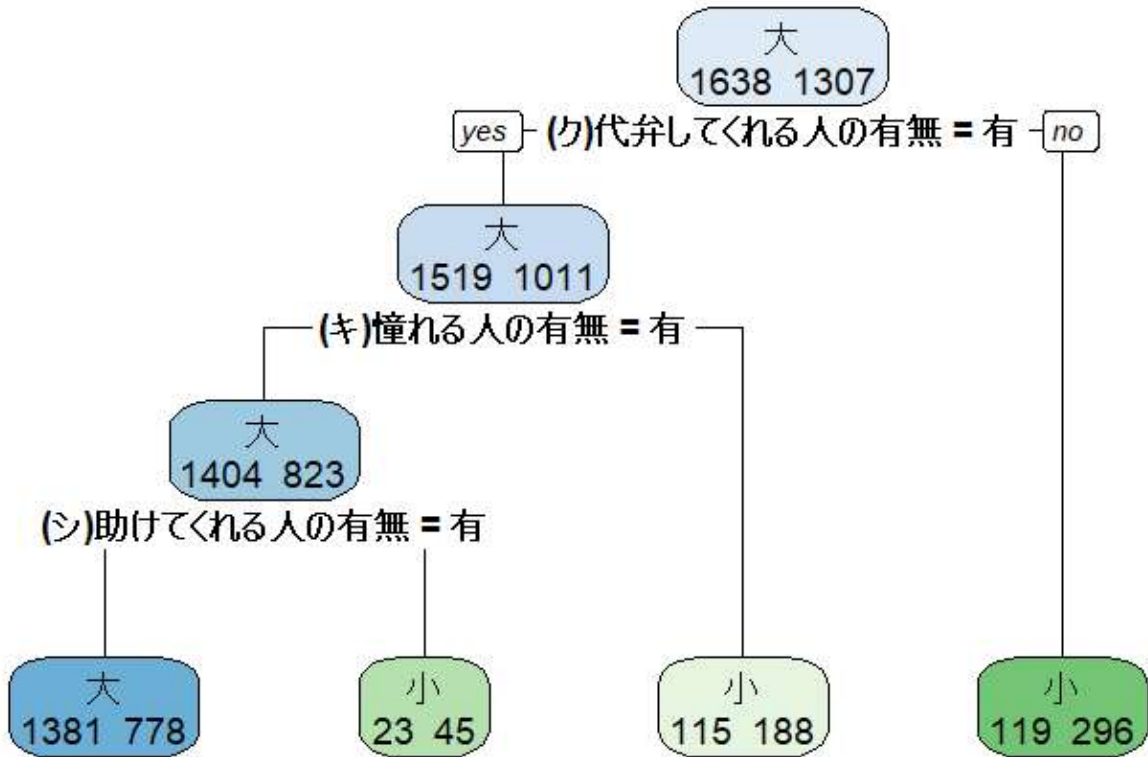
「(シ)あなたがしたことではないのに、あなたのせいにされたときに、守ってくれそう・助けてくれそうな人」

「(キ)あの人のようになってみたいと思うような、尊敬しあこがれる人」

「(エ)あなたに、知らないことや新しく楽しいこと、ワクワクすることを教えてくれる人」

「(サ)だれかとけんかしたときなどに、間に入ってくれる(くれそうな)人」

・ 知的謙虚



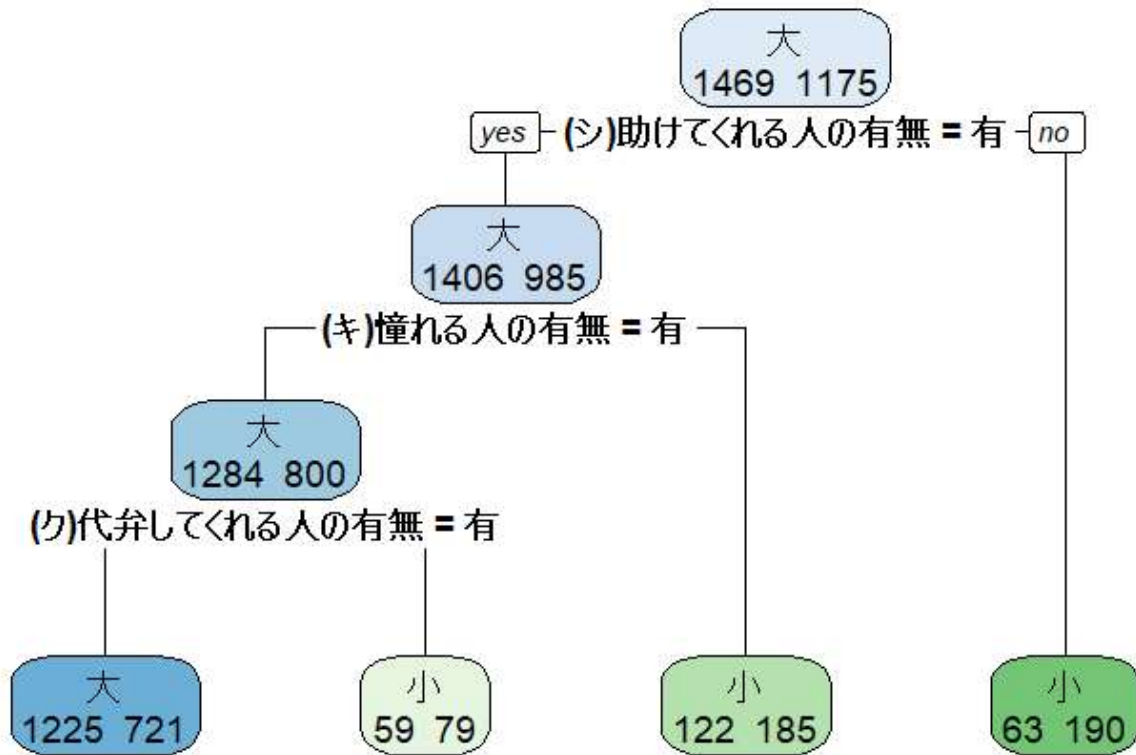
知的謙虚が大きい児童グループと小さい児童グループを分ける役割

「(ク)はずかしくて思っていることを言い出せないときに、あなたに代わって伝えてくれる(くれそうな)人」

「(シ)あなたがしたことではないのに、あなたのせいにされてしまったときに、守ってくれそう・助けてくれそうな人」

「(キ)あの人のようになってみたいと思うような、尊敬しあこがれる人」

・自己肯定感



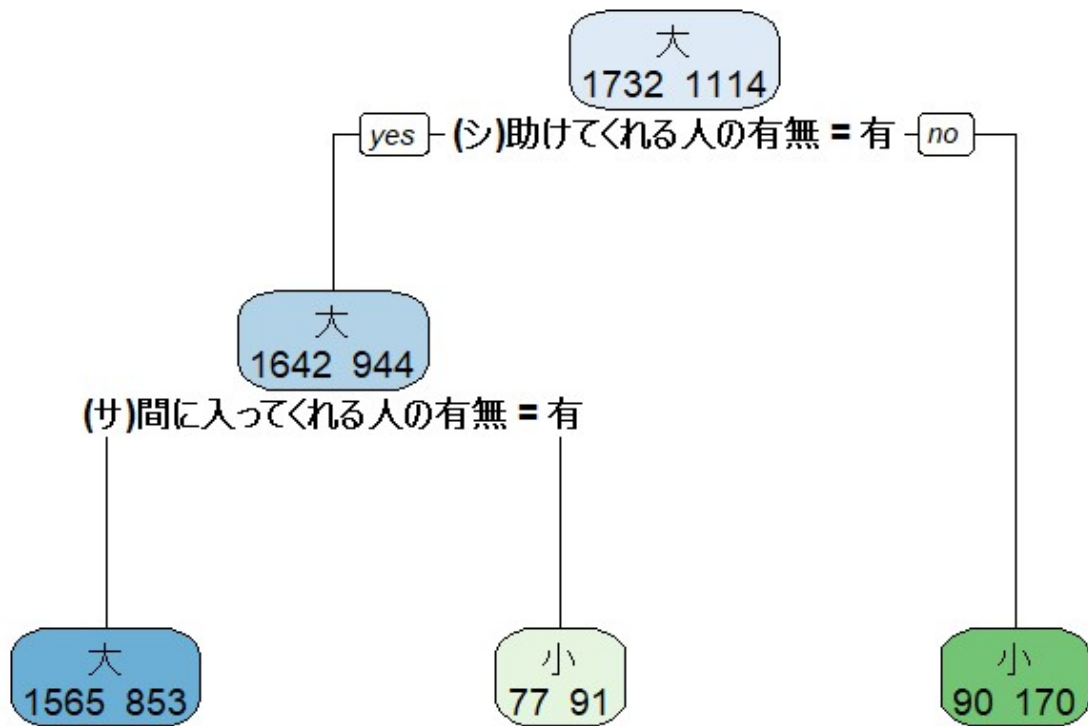
自己肯定感が大きい児童グループと小さい児童グループを分ける役割

「(シ)あなたがしたことではないのに、あなたのせいにされたときに、守ってくれそう・助けてくれそうな人」

「(キ)あの人のようになってみたいと思うような、尊敬しあこがれる人」

「(ク)はずかしくて思っていることを言い出せないときに、あなたに代わって伝えてくれる(くれそうな)人」

・セルフコントロール



セルフコントロールが大きい児童グループと小さい児童グループを分ける役割

「(シ)あなたがしたことではないのに、あなたのせいにされてしまったときに、守ってくれそう・助けてくれそうな人」

「(サ)だれかとけんかしたときなどに、間に入ってくれる(くれそうな)人」

まず、周りの人についてお聞きします。

それぞれの文章を読み、当てはまる人を全て選びましょう。 <役割に関する項目>

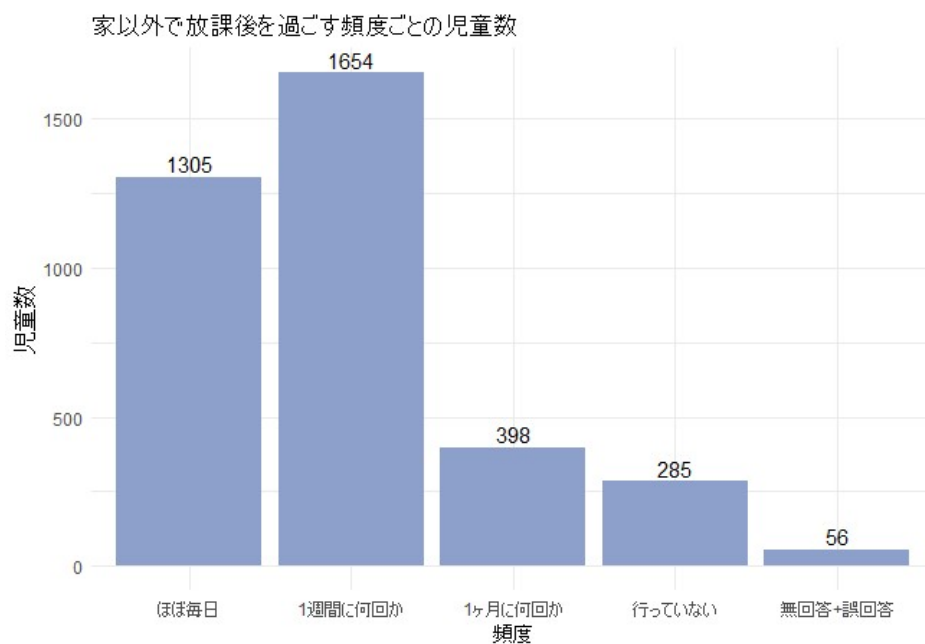
次は、学習や生活に対する意識に関する質問です。

それぞれの質問を読んで、当てはまる答えを一つだけ選びましょう。 <非認知能力に関する項目>

最後は放課後の過ごし方に関する調査です。

それぞれの質問を読んで、当てはまる答えを一つだけ選びましょう。 <放課後に関する項目>

<放課後過ごす場所ごとの児童数>



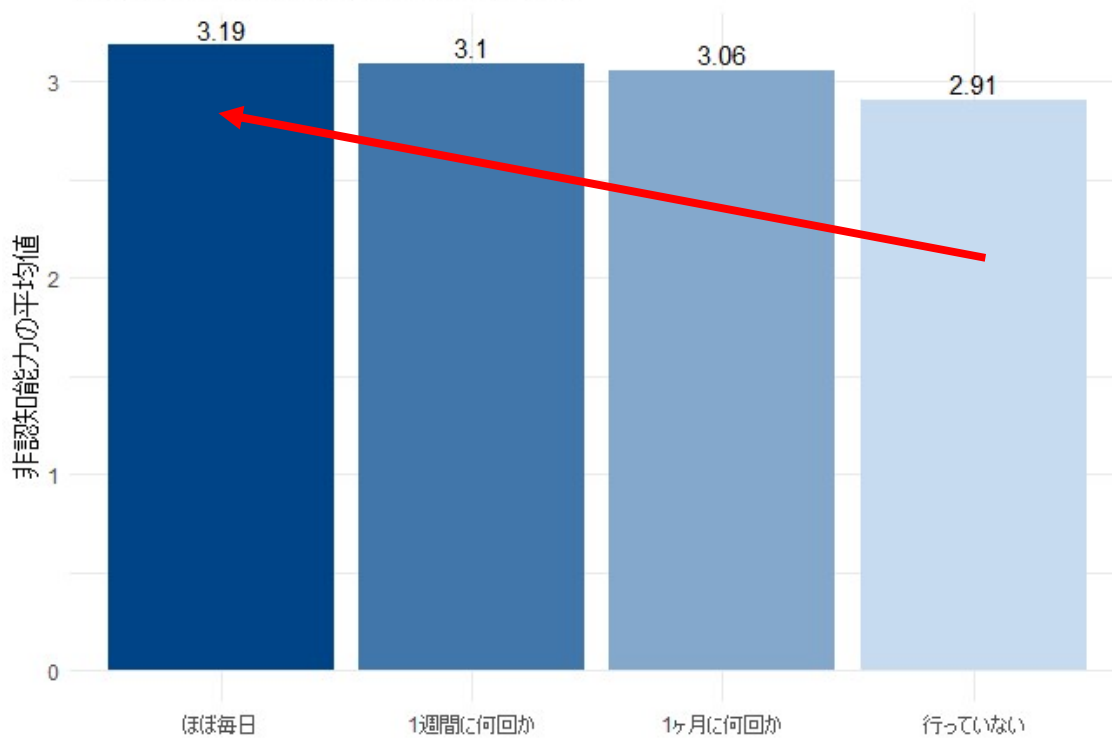
回答選択	1.ほぼ毎日	2.1週間に何回か	3.1ヶ月に何回か	4.行っていない	無回答
回答数	1,305	1,654	398	285	56

横軸：(ユ)放課後、家以外の場所にどれくらい行っていますか の回答選択肢

縦軸：児童数

<放課後過ごす場所と非認知能力>

家以外で放課後を過ごす頻度ごとの平均値



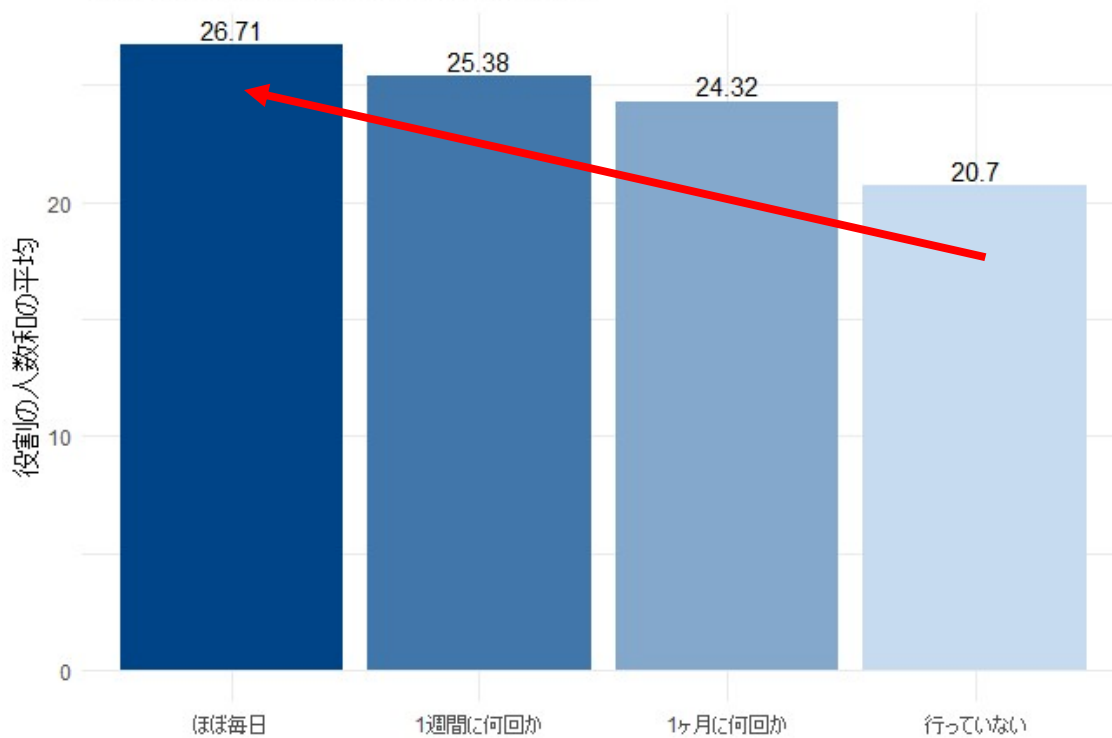
横軸：(ユ)放課後、家以外の場所にどれくらい行っていますか の回答選択肢

縦軸：非認知能力の平均

考察：家以外の放課後過ごす場所で過ごす頻度が多い児童ほど、非認知能力が高い

<放課後過ごす場所と役割>

家以外で放課後を過ごす頻度ごとの平均値



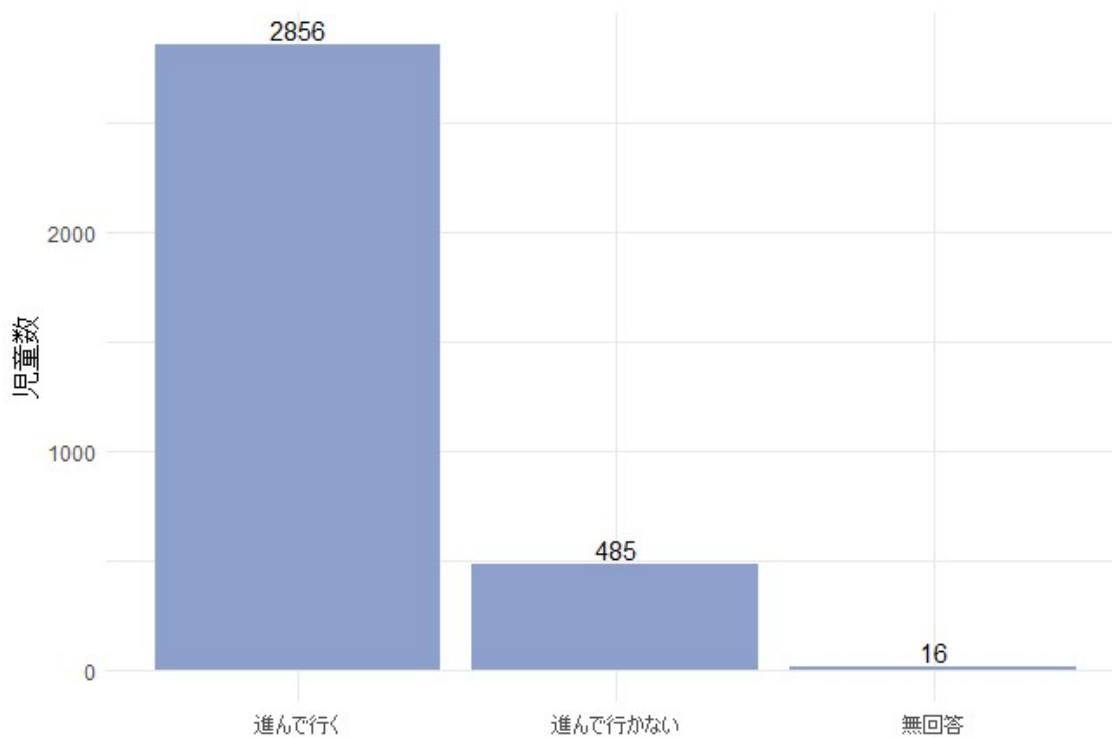
横軸：(ユ)放課後、家以外の場所にどれくらい行っていますか の回答選択肢

縦軸：役割に関する 12 項目の人数の和の平均

考察：家以外の放課後過ごす場所で過ごす頻度が多い児童ほど、役割が多い

<(ヨ)自分で進んで行っているかいないかの児童数>

放課後に過ごす場所への主体性の違いごとの児童数



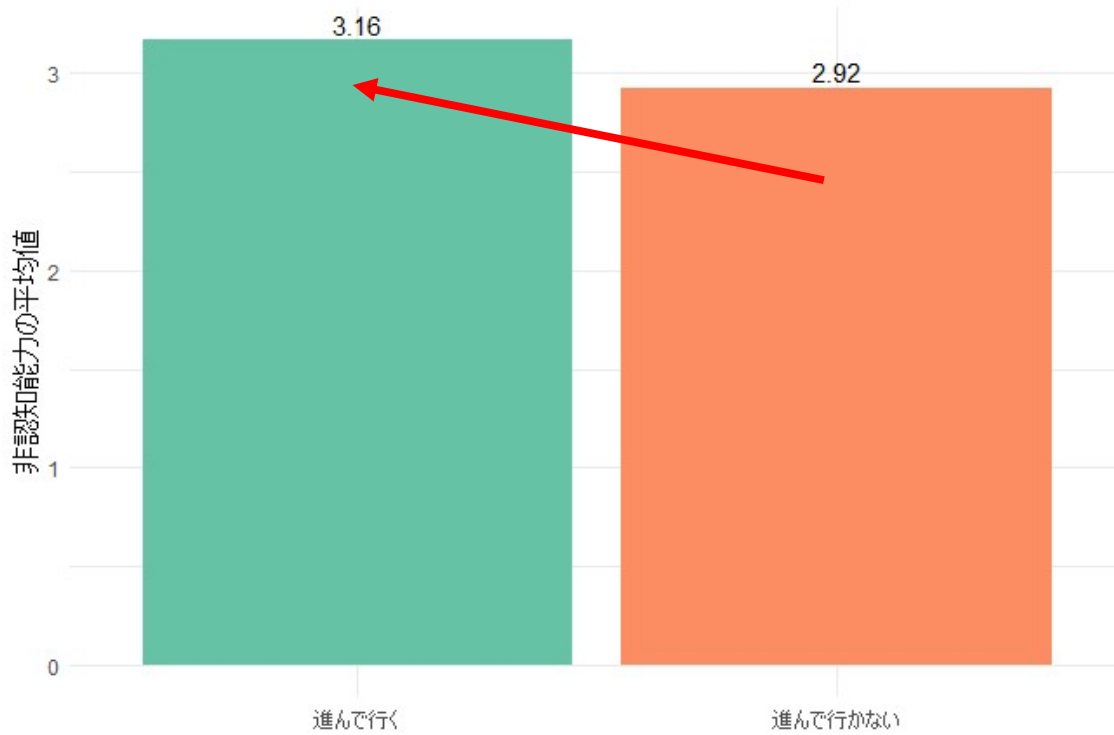
回答選択	1.はい(自分から進んで行く)	2.いいえ(自分から進んで行かない)	無回答
回答数	2,858	485	16

横軸：(ヨ)放課後を過ごす場所には、自分から進んで行っていますか の回答選択肢

縦軸：児童数

<自分から進んで行くかと非認知能力>

放課後に過ごす場所への主体性の違いごとの平均値



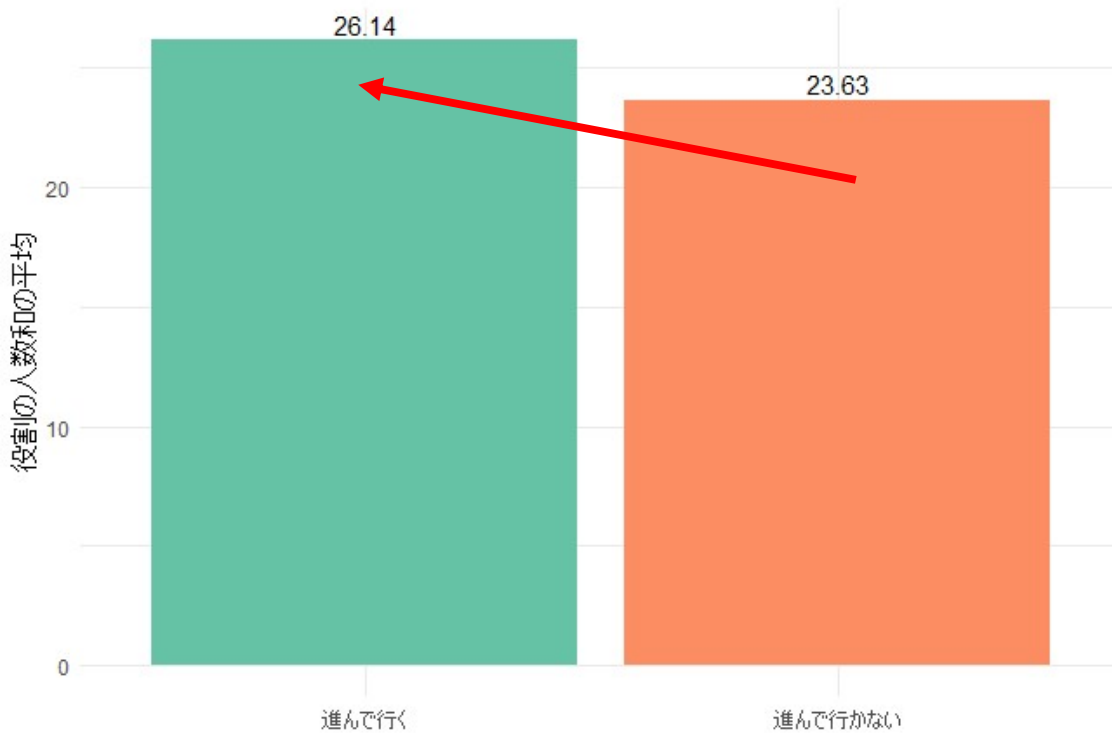
横軸：(ヨ)放課後を過ごす場所には、自分から進んで行っていますか の回答選択肢

縦軸：非認知能力の平均

考察：進んで行く児童の方が、非認知能力が高い

<進んで行くかと人数和>

放課後に過ごす場所への主体性の違いごとの平均値



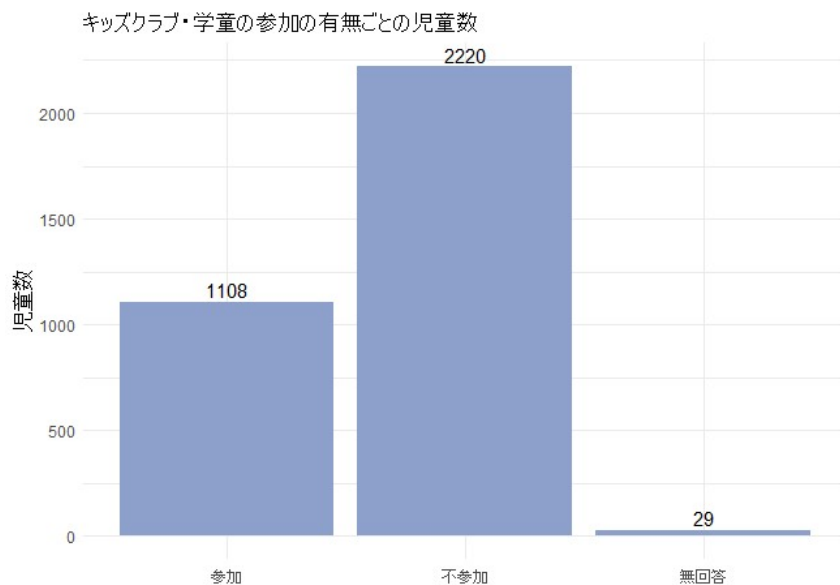
横軸：(ヨ)放課後を過ごす場所には、自分から進んで行っていますか の回答選択肢

縦軸：役割に関する 12 項目の人数の和の平均

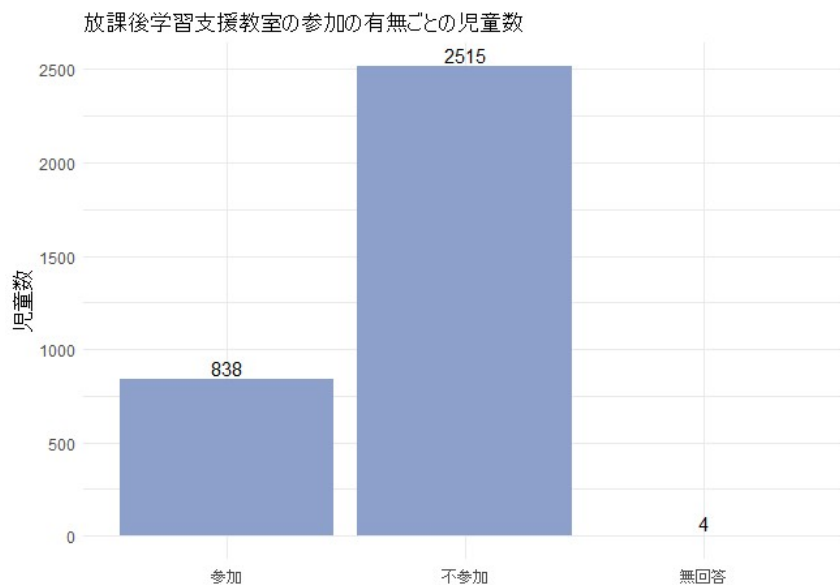
考察：進んで行く児童の方が、役割の人数が多い

<キッズクラブ・学童や放課後学習支援教室の参加の有無>

(ラ)キッズクラブ・学童の参加の有無



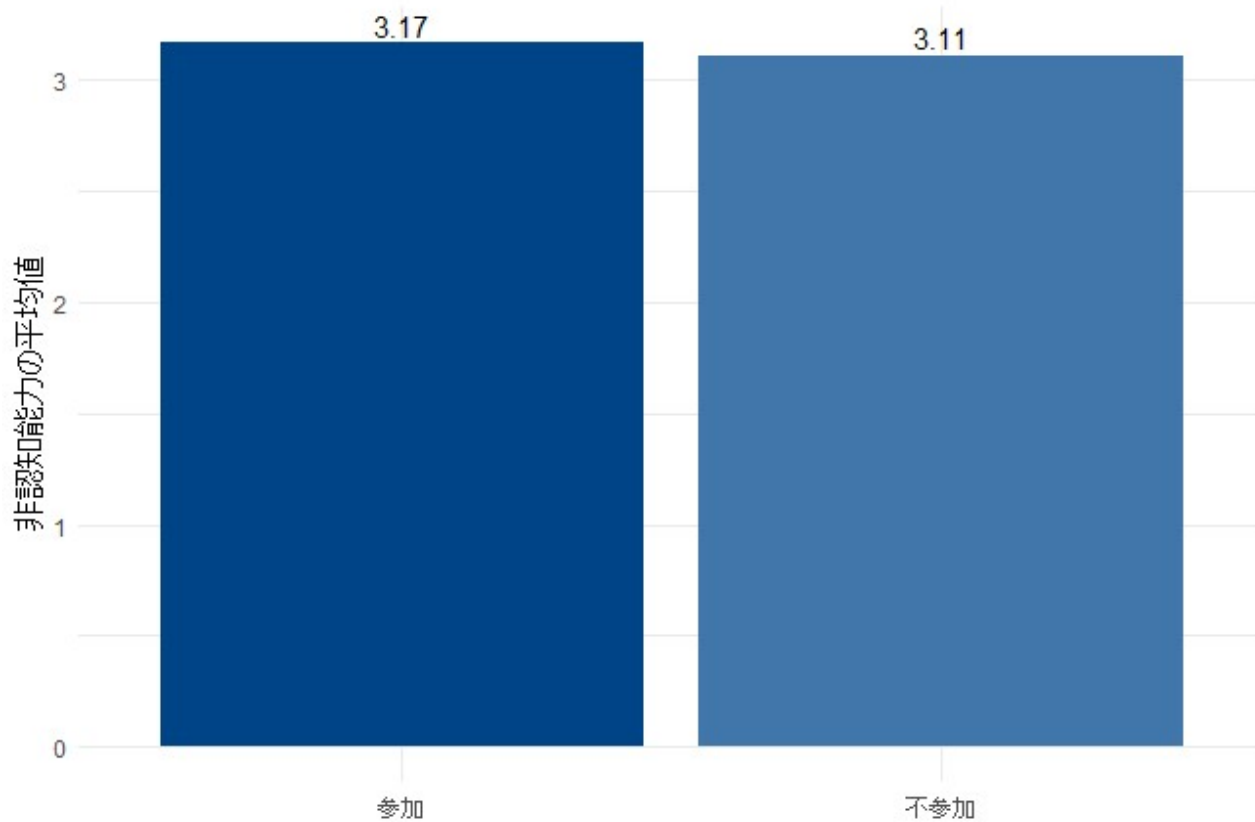
(リ)放課後学習支援教室の参加の有無



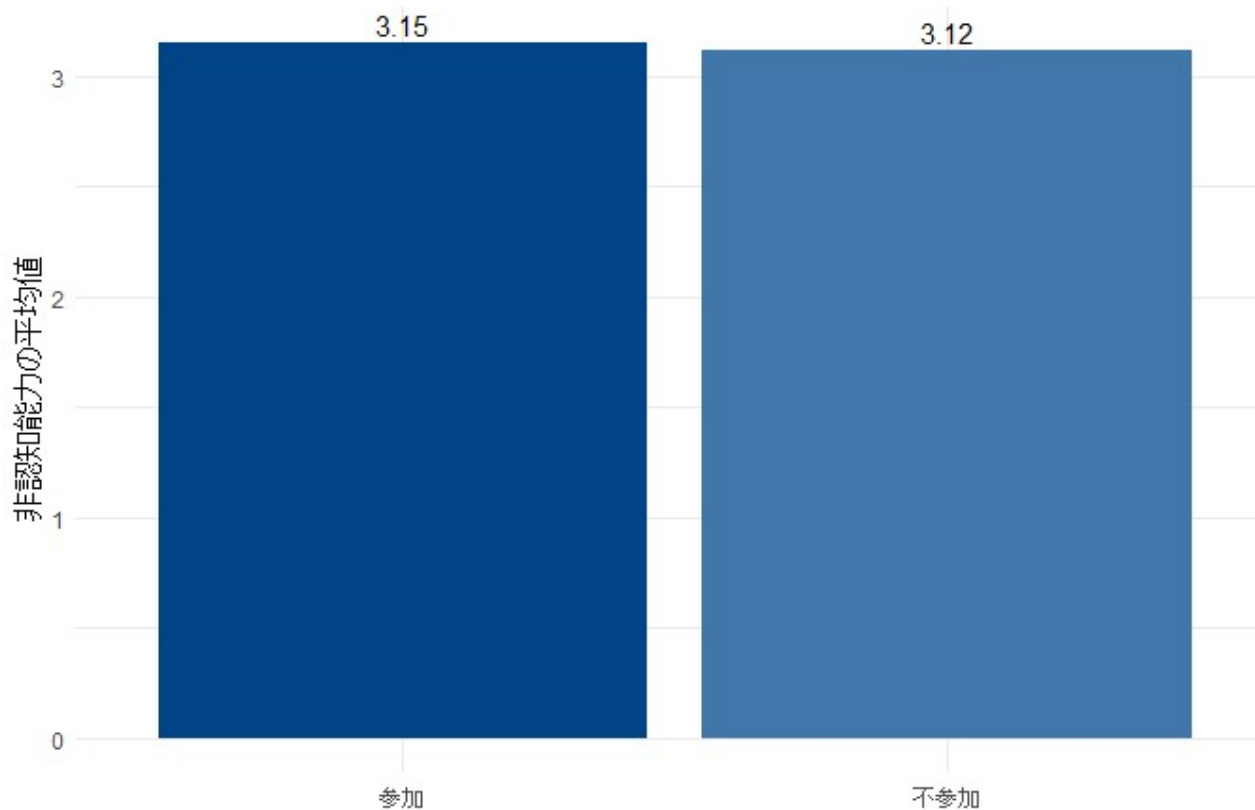
	1.はい(参加)	2.いいえ(不参加)	無回答
(ラ)キッズクラブ・学童 の回答数	1,108	2,220	29
(リ)放課後学習支援教室 の回答数	838	2,515	4

<キッズクラブ・学童や放課後学習支援教室の参加等と非認知能力>

キッズクラブ・学童の参加の有無ごとの平均値



放課後学習支援教室の参加の有無ごとの平均値



横軸：(ラ)や(リ)の回答選択肢

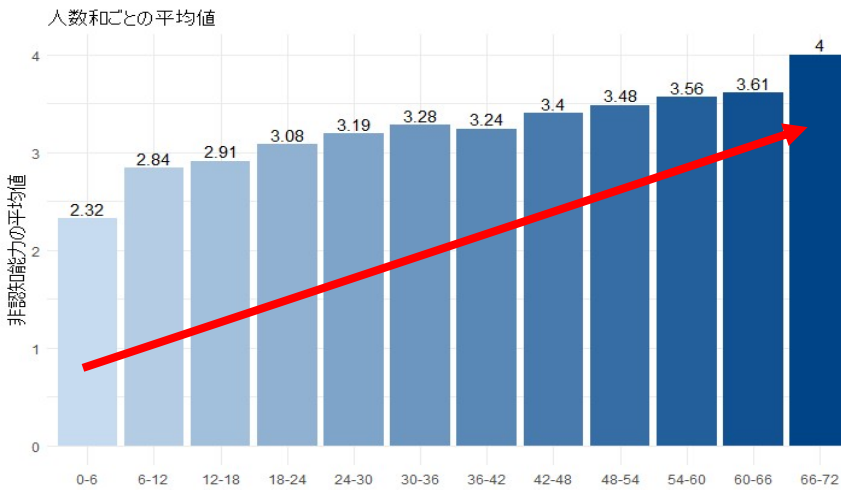
縦軸：非認知能力の平均

考察：キッズクラブ・学童や放課後学習支援教室の参加の有無は、非認知能力に関係がない。

参加しない児童の中には、家庭や塾・習い事等で、非認知能力が上がる環境にいる児童がいると考えられ、参加している児童との平均に差が出ない可能性がある。

参加している児童の平均が3を超えているので、キッズクラブ・学童や学習支援教室は、非認知能力を伸ばす場所のひとつともいえる。

<周りの人と非認知能力>

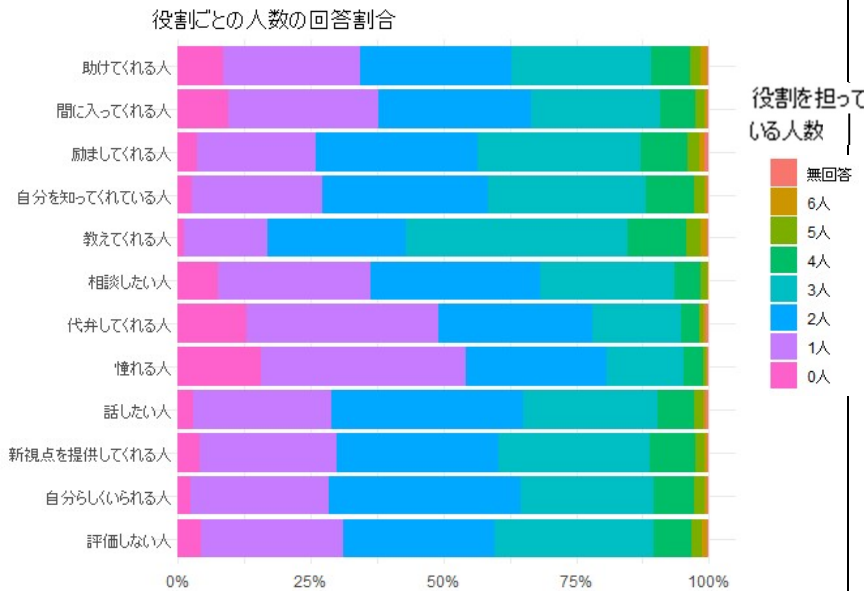


非認知能力(メタ認知・好奇心・知的謙虚・自己肯定感・セルフコントロールをまとめたもの)は、役割を担う周りの人が多く存在するほど、高くなる傾向にある。非認知能力を上げるためには、児童にとってなにかしらの役割になると良い。

現状として、「何か分からないときに教えてくれる人」に関して、約50%の児童は3人以上いると回答している。一方で、「あの人のようになってみたいと思うような、尊敬し憧れる人」や「はずかしくて思っていることを言い出せないときに、あなたに代わって伝えてくれる(くれそうな人)」に関しては、約50%の児童が1人以下と回答している。

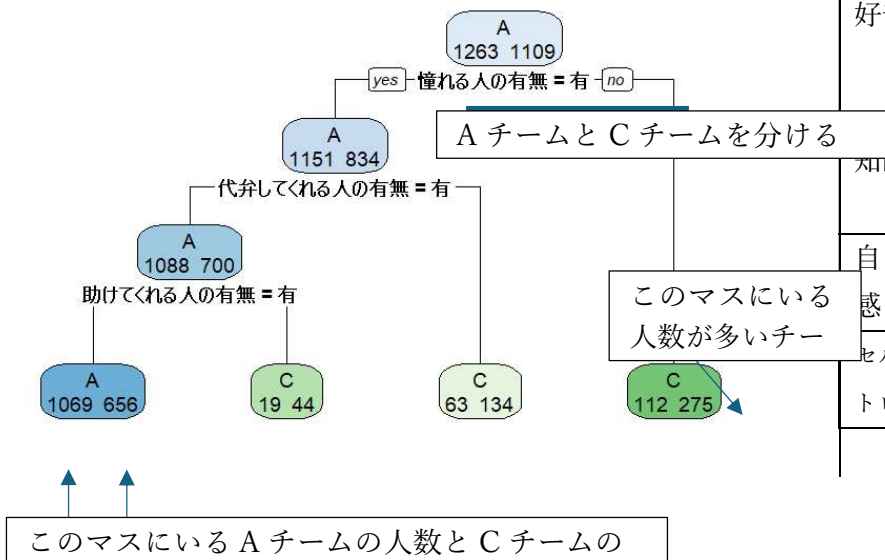
個々の児童によって異なるが、この二つの役割を担う人を増やしていくと良いと考えられる。

<周りの人の役割の現状>



各非認知能力で、能力値で高・中・低の3グループに分け、高と低チームを分ける役割を調べた。その結果が以下の通りである。

<各非認知能力に関連する役割> 例：メタ認知



メタ認知	憧れる人・代弁してくれる人・助けてくれる人
好奇心	憧れる人・新視点を提供してくれる人・間に入ってくれる人
知的謙虚	代弁してくれる人・憧れる人
自己肯定感	助けてくれる人・憧れる人
セルフコントロール	助けてくれる人・間に入ってくれる人

ミーティング要約: 周りの人、学習意識について打合せ (2025/02/22)

要点

北村克久と今井薫は、非認知能力に関する研究データの報告書とプレゼンテーション資料について打ち合わせを行い、グラフや分析結果の確認を行った。彼らは、区役所への提出資料や校長会向けの資料について議論し、子どもたちの人格形成における多様な人との出会いの重要性を強調することで合意した。最後に、グラフのデザインと表現方法について検討し、より分かりやすい形式への変更を決定した。

次のステップ

- 今井薫: グラフの説明文を修正し、「高い/低い」を「大きい/小さい」という表現に変更する
- 今井薫: 報告書の各グラフに問題文（質問項目）を四角枠で追加する
- 今井薫: 差が明確でないグラフや説明が難しいグラフを削除し、報告書を整理する
- 今井薫: 単純な数値データは表形式に変更する
- 今井薫: 修正した報告書のデータを北村克久へメールで送付する
- 北村克久: 土屋先生と指標に関する修正について調整する
- 今井薫: 3月14日9時半の校長会に出席する
- 今井薫: 3月4日の打ち合わせに出席する

要約

非認知能力と児童の役割

今井薫と北村克久は非認知能力に関する研究データの報告書について打ち合わせを行い、グラフや分析結果を確認している。報告書には、周囲の人数と非認知能力の相関関係、児童の役割別の分布、そしてメタ認知能力の高低チームにおける「憧れる人」「代弁してくれる人」「助けてくれる人」の存在の影響が含まれており、これらのデータを区役所へ提出することが決定している。北村克久は疲労を感じているものの、土屋先生の報告と合わせて区役所への提出を進める必要性を強調している。

調査結果、プレゼンテーション

北村克久と今井薫は、非認知能力に関する調査結果の報告書とプレゼンテーション資料について打ち合わせを行い、グラフや役割の説明を一枚にまとめることを決定する。土屋先生が提示した指標との関連性について議論し、子どもたちの人格形成における多様な人との出会いの重要性を強調することで合意し、校長会向けの資料では決定木の詳細な説明を含めながらも、公聴会では今井薫が重点を置きたい「尊敬する人」などの要素を中心に説明することを決める。

平均値を示すグラフの改訂

ミーティングで、北村克久と今井薫は、非認知能力の平均値を示すグラフのデザインについて議論しました。彼らは、グラフの複雑さを避けるために、12項目の平均値を示す折れ線グラフから、各項目の回答数を示す棒

グラフに変更することを決定しました。彼らはまた、グラフの説明を改善するために、縦軸のラベルを「非認知能力の平均値」に変更することを検討しました。北村は、グラフの説明を簡素化するために、非認知能力の「高い」または「低い」ではなく、「大きい」または「小さい」に焦点を当てることを提案しました。